

## 古代アンデス文明と日本人—放送大学特別講義と展示会

稲村哲也<sup>1)</sup>・大貫良夫<sup>2)</sup>・森下矢須之<sup>3)</sup>・野内セサル良郎<sup>4)</sup>・阪根博<sup>5)</sup>・尾塩尚<sup>6)</sup>

### Ancient Andean Civilization and Japanese: Special Lecture of the Open University of Japan and the Exhibition in Akita.

Tetsuya INAMURA, Yoshio ONUKI, Yasuyuki MORISHITA, Cesar Yoshiro NOUCHI, Hiroshi SAKANE,  
Hisashi OSHIO

#### 要 旨

1898年に秋田で生まれた天野芳太郎は、30歳のときに中南米にわたって実業家として成功し、後にペルーのリマ市に考古学博物館を創設した人物である。

天野は少年時代から考古学に関心をもっていたが、その関心を決定づけたのは、1935年のマチュピチュ訪問であった。天野はマチュピチュで、そこに住んでいた野内与吉という日本人に出会い、彼の案内で一週間ほどマチュピチュを踏査した。

しかし、第二次世界大戦が始まると、天野は総てを失い、北米の収容所に入れられたあと、日本に送還された。戦後の1951年に再び南米に向かい、ペルーで事業を再開し成功するが、後半生は古代アンデス文明の研究と土器、織物などの考古遺物のコレクションに身を投じ、1964年リマに博物館を設立したのである。

それに先立つ1956年、当時東京大学助教授であった泉靖一がリマで天野芳太郎と出会った。泉はすぐにアンデス研究を始め、調査団を組織し発掘を始めた。最初のコトシュ遺跡の発掘で、アメリカ大陸最古の神殿を発掘した。東京大学はそれ以来アンデスの研究で大きな実績を重ねてきた。

岡山出身の実業家森下精一は、1969年リマで天野芳太郎の博物館を訪問し、古代アンデスの土器や織物のすばらしさに衝撃を受け、中南米の考古遺物を蒐集し、1975年自らも岡山県に博物館を開設した。

筆者らは、放送大学のTV特別講義「古代アンデス文明と日本人」を制作し、2015年秋田でそのテーマの展示会を企画し実現した。本稿では、それらの内容を中心に、日本人による古代アンデス文明研究、その背景としての先人たちの「運命的」な出会い、そして秋田で開催した展示会について論じる。

#### ABSTRACT

Yoshitaro Amano was born in Akita in 1898 and migrated to Middle and South America when he was 30 years old. He achieved great success with his business and founded an archaeological museum in Lima, Peru. He had been interested in archaeology since childhood, and it became decisive when he visited Machu Picchu in 1935. He met Yokichi Nouchi, a Japanese migrant who lived there, and researched Machu Picchu with Nouchi's guide for a week.

However, Amano lost everything and was held in a prison camp in North America when World War II had started and was sent back to Japan afterward. He again journeyed to South America after the war in 1951 and succeeded in his new business. He threw himself into researching ancient Andean civilization and collections of archaeological artifacts, such as clay pots and textiles, and, finally, opened a museum with those collections in Lima in 1964.

In 1956, Seichi Izumi, an assistant professor at Tokyo University at the time, encountered Amano in Lima. Izumi organized an excavation research group. His team found the oldest temple in the Americas for the first excavation in Kotosh ruins. The team has made great achievements since then.

In 1969, Seichi Morishita, a businessman from Okayama, was highly impressed by the Andean artifacts when he visited the Museum Amano in Lima, which led him to collect archaeological items from Middle and South America and open his own museum in Okayama in 1975.

<sup>1)</sup> 放送大学教授 (「人間と文化」コース)、

<sup>2)</sup> 東京大学名誉教授・東京大学古代アンデス文明調査団元団長・野外民族博物館リトルワールド館長、<sup>3)</sup> BIZEN中南米美術館館長、

<sup>4)</sup> 日本マチュピチュ協会副会長・南山大学大学院生、<sup>5)</sup> 早稲田大学・武蔵野美術大学招聘講師、<sup>6)</sup> 著述家・元映画プロデューサー

The authors planned and made a special lecture on TV, “The Ancient Andean Civilization and Japanese,” and planned an exhibition of the same theme in Akita in 2015. In this article, the author describes the ancient Andean civilization research carried out by Tokyo University, the background of the key persons’ “destined” encounters, and the contents and process of the exhibition in Akita.

## 1 はじめに

### 1-1 運命的な出会いとアンデス研究

「南米ペルー、世界遺産のマチュピチュそしてナスカの地上絵。これらはペルーに栄えた古代アンデス文明による驚異的な創造物である。この文明の起源と発展そしてその最後を飾るインカ帝国について研究し、その成果が世界中から高く評価される日本人は数十人を数える。この目覚ましい学術的成果が生まれる契機となったのが、お互いに名前も顔も知らなかった二人の日本人の出会いであった。ひとり文化人類学者泉靖一、もうひとり秋田県出身の天野芳太郎である」(大貫2015)。アンデス研究は、半世紀以上にわたり東京大学が大きな研究実績を残してきた。その発端が上記の1956年のリマでの二人の出会いにあった。

戦前、京城大学に在籍して済州島などで文化人類学調査に従事していた泉靖一は、敗戦後博多に引き上げたのち、1951年東京大学助教授に就任した。1956年、日系人社会の調査のためブラジルに赴いたその帰途、リマに寄って天野芳太郎に出会った。それが、多くの日本人をアンデスの魅力に引きこむことになった「運命的な出会い」であったことは、本人も想像しなかったに違いない。泉は、天野からペルーでの研究を勧められた。そして、1958年には石田英一郎(当時東大教授)を団長、泉を副団長とする多分野の東大調査団が組織され、ペルーでの広域調査が行われた。

1960年には、泉靖一団長のもと東京大学古代アンデス文明調査団(以後東大アンデス調査団)が組織され、ペルー中部アンデスのワヌコで発掘が開始された。当時大学院生だった大貫良夫も参加したコトシュ遺跡での発掘が進むと、チャビン期の神殿の下から「交差した手の神殿」(無土器時代、当時最古の神殿)が現れるという大発見があり、その後の東大アンデス調査団の輝かしい伝統につながった。大貫良夫が3代目の団長となって、調査団はクントゥル・ワシ遺跡発掘等でさらに大きな学術的成果をあげ、米大陸最古の黄金の冠・装身具の出土をきっかけに現地に博物館を設立した。

天野芳太郎がペルーで考古学に身を投じる大きなきっかけとなったのが、1935年のマチュピチュ訪問である。ここでも劇的な出会いがあった。野内与吉という日本人移民がすでに遺跡のふもとのマチュピチュ村に住みつき、小さなホテルを経営していたのである。天野はこのホテルに滞在し、野内の案内で一週間マチュピチュを探索したという。天野のちに「マチュピチュ案内」という最初の日本語によるガイドを刊行している。野内はマチュピチュ村の初代の行政長になった

人物である。

天野は1964年にリマに「天野博物館」を設立するが、その5年後、岡山県の実業家森下精一がリマに天野を訪ねる。森下はもともと備前焼きなどに造詣が深かったが、天野に見せられたアンデスの土器や織物の魅力にとりつかれ、中南米の考古遺物のコレクションを始め、その6年後の1975年に、岡山県備前市日生に美術館を開設してしまう。

### 1-2 アンデス文明展の企画

第一筆者稲村哲也(以後筆者とする)は、文化人類学教室に在籍したものの、アンデスをフィールドとしながら考古学ではなく文化人類学を専門としたが、東大のアンデス研究の伝統がなければ、おそらく別の地域に行っていただろう。筆者は、増田昭三(義郎)教授が組織した最初のアンデス民族学調査団に加わり1978年にペルーの地を踏んだが、その調査団のメンバーに大貫良夫(当時は野外民族博物館リトルワールド主任研究員)も加わっていた。民族学調査団では、阪根博(天野芳太郎の孫で、当時は天野博物館スタッフ)と共に増田教授の現地調査に同行した。また、大貫は同行して、遺跡めぐりや広域調査をし、その後2年間、アレキパ県のプーナ(高原)でリヤマ・アルバカ牧民社会の調査を続けた。1981年の初めにペルーから帰国すると、増田教授や大貫(東大助教授に異動)に勧められ、開館を2年後にひかえていたリトルワールドに就職した。このリトルワールド自体も、泉靖一が名古屋鉄道に協力し、設立に至ったものである(稲村2016)。

こうしてふりかえてみると、天野芳太郎と泉靖一の「運命的な出会い」が、筆者の人生にも、間接的に大きな影響を与えたのだとあらためて思う。筆者は天野の偉大な人柄に直接触れる僥倖をえた最後の世代である。天野に直接出会っていない若い研究者も、東大のアンデス研究の「伝統」や東大アンデス調査団を引き継いだ大貫らとの出会いを通じてアンデス研究の道に進み、それぞれの人生に多大な影響を受けてきた。「運命的な出会い」はそこから波及した多くの出会いを次々と再生産し、時の流れとともにより大きな波紋を広げてきたわけである。

「天野博物館友の会」は天野博物館を日本サイドから支援してきた。会長を大貫良夫、副会長を尾塩尚(天野芳太郎の伝記「天海航路」の著者)と筆者が務めている。2014年に、天野博物館設立の50周年を迎えるにあたり、この3人を中心にアンデス文明展を企画した。経緯は省略するが、筆者は、森下精一の孫にあたる現BIZEN中南米博物館館長の森下矢須之、さらに、野内与吉の孫にあたる野内セサル良郎との知己を

得ていた。そこで、BIZEN中南米博物館の所藏品（土器、織物）と東大アンデス調査団の出土品（黄金製品のレプリカ等）、天野芳太郎と野内与吉の遺品などを展示するアンデス展を開催することになった。まず、2015年1月から6月まで、東京駅前のJPタワー（KITTE）内にある東京大学総合研究博物館分館のインターネットメディアテクでの開催が実現した。大貫と鶴見英成（同博物館助教）の尽力によるものである。さらに、2015年6月28日から7月20日まで、天野芳太郎の生誕地である秋田での開催も実現した。

一方、筆者は放送大学の特別講義「古代アンデス文明と日本人」を2014年に企画・制作し、2015年から放映が始まった。同講義のスタジオ収録では、上述した4人の先達の3代目にあたる、大貫良夫、阪根博（リマ市在住）、森下矢須之、野内セサルの4名が集合した（図1）。これも出会いの再生産の一つと言えよう。

本稿では、この特別講義の内容を踏まえ、古代アンデス文明、4名の先達の出会い、また特別講義のコンセプトの具現化としての秋田での展示会などについて述べたい。

## 2 古代アンデス文明と東大による発掘

### 2-1 アンデス文明の特徴

アンデスは南米大陸の西岸にそって南北約9000キロにわたって貫く山脈である。その中心部、中央アンデスを中心に古代アンデス文明が栄えた。中央アンデスは緯度的には熱帯に位置するため、標高差によって極めて多様な自然環境をもつ（図2）。アンデスの民は、その多様な環境を最大限に利用して、高度な文明を築いた。農業では、ジャガイモ、トウモロコシをはじめ多様な植物が栽培された。農耕に不向きな高原では、ラクダ科動物のリャマとアルパカが家畜化され、前者は輸送のため、後者は毛の利用のために飼育されてきた（稲村1995、2014）。

古代アンデス文明は、中米のメソアメリカ文明と同様、基本的には旧大陸（アジア・ヨーロッパ）の文明とは交流せず、独自の発達をとげた（以後、杉山三郎・嘉幡茂・渡部森哉2011を参照）。見事な石造建築、膨大な量の日干しレンガを積み上げた巨大な建造物、丹念に磨きあげて作った土器や石器、緻密な図像を組み込んだ織物、大地の上に描かれた巨大な地上絵などが、アンデスの顕著な特徴である。新大陸の文明は、旧大陸の文明と比較され、「～が無い」と表現される。アジアやヨーロッパと比較して、アンデスに無かったものとして、文字、車輪、鉄が代表としてあげられる。アンデスの人々は、巨大神殿の建設などにも、人間の等身大の技術を用いた。山から石を切り出して運び加工するために、大量の労働力を動員し、莫大な時間を費やして仕上げた。アンデスでは、貨幣経済が発達しなかったし、基本的には自給自足経済であった。アジアのように、同一環境が平面的に広まる場合、環



図1 アンデスの先達とその3代目（特別講義「古代アンデス文明と日本人」パターン）



図2 標高による多様な気候帯（特別講義「古代アンデス文明と日本人」パターン）



図3 アンデス文明編年（特別講義「古代アンデス文明と日本人」パターン）

境が変化する境界などに市が発達し、生産物を交換することが多かった。しかし、アンデスでは標高差によって環境が著しく異なるため、同一集団が複数の環境を同時に利用するシステムが発達した。産地が限定される黒曜石などは、長距離を運ばれて利用されたが、そのメカニズムはまだよくわかっていない。

アンデス古代文明の編年では、チャビン文化が紀元前の1千年紀に比較的広い範囲で栄えたため、この時代をチャビンのホライズン（前期ホライズン）としてきた（図3）。現在では、チャビン文化より古い文化が多く研究されてきたため、紀元前3000年から0年頃までを形成期と呼ぶ（大貫ほか2010）。チャビンが衰

退した後、各地に個性的な文化が起こった。この時期を地方文化期と呼ぶ。ペルー南部のナスカ文化が、地上絵によって有名である。ナスカは多彩式の土器や精緻な織物でも有名である。この同時代の文化としては、他に、日干しレンガの巨大な神殿群が建設され、写実的な傾向の強い造形土器、多様な図像が描かれた土器、煌びやかな黄金製品が特徴的なモチェ文化などがある。次のホライズンとして、チチカカ湖沿岸のティアワナコ文化を起源とするワリ文化が紀元後の700年頃から1000年ごろまで広がった。この時代を中期ホライズン、またはワリ期と呼ぶ。これが衰退すると、再び各地の個性的な文化が栄えるが、この時代は地方国家期と呼ばれる。チムー文化がその代表である。最後にインカ帝国がアンデスを南北5000キロにわたって版図を広げたが、このインカ帝国期を後期ホライズンとも呼ぶ。強大な権力をもつインカ（皇帝）を頂点とするピラミッド型の政治構造が発達し、首都クスコに、国家宗教である太陽信仰の神殿、大規模な砦や王宮が、巨大かつ精巧な切り石によって建設された。インカ帝国は実際にはタワンティン・スую（四つの地方）と呼ばれ、次々と征服された各地方にインカ道が建設され、飛脚制度も発達した。このインカ帝国も、1532年から33年にかけて、スペイン人征服者フランシスコ・ピサロの軍によって、第13代皇帝アタワルパが捕縛、殺害され、事実上崩壊した。首都クスコは、スペイン征服者に略奪され、スペイン植民地の都市として造りかえられた。しかし、地方の拠点のひとつであったマチュピチュは、1911年にアメリカ人の歴史学者ハイラム・ビンガムが地元住民に案内されて「発見」するまでは、外部の目にさらされることがなかった。

## 2-2 東大調査団による発掘調査

東大調査団が一貫して取り組んできたテーマは、アンデス文明初期の社会の動態であった。この時期をアンデス考古学上、文明の母体が形成されたという意味で形成期と呼ぶ（大貫ほか2010：3）。1960年、東大調査団が最初に発掘を行なったコトシュ遺跡での「交差した手の神殿」の発見は、アンデス文明の形成期の歴史記述を塗り替える大発見となった（以下、大貫1998、2015、大貫ほか2010を参照）。

東京大学のアンデス調査団は、当時、騎馬民族説で有名な江上波夫が率いるイラク・イラン調査団に呼応する面を持っていた。先進文明の源である古代メソポタミアで文明の起源を探る、それが江上調査団の趣旨であった。その論を進めて、アジアやヨーロッパとは関係なく築かれた文明との比較が構想され、それによってつけの文明が古代アンデス文明であった。

当時、アンデス文明の起源はまだ大きな謎であった。紀元前800年頃といわれるチャビン文化が文明の基礎を作り、そこからアンデス高地と海岸砂漠に文明が広がったという道筋が通説だったが、その中心地はチャビン・デ・ワンタル神殿で、アンデス山地の狭い谷間の標高3100mにある。チャビンにはすでに、土

器、織物、石彫、大規模な石造建築、灌漑農耕、トウモロコシやジャガイモの栽培、リヤマとアルパカの家畜飼育、複雑な社会組織などがそろっていた。文明の諸要素が急に生まれるとは考えられずチャビン文化に先立つ歴史を明らかにする必要があった。

1958年の広域にわたる一般調査の結果、アンデス文明形成期の研究の最初にコトシュ遺跡を集中的に発掘することになった。チャビン中心説の提唱者フーリオ・C・テーヨも、チャビンよりも古そうな土器片がワヌコのコトシュやシヤコトという遺跡で見つかることを述べていた。泉靖一は自分の目でそれを確かめ、コトシュ発掘に賭けた（写真1）。コトシュ遺跡はリマの北東およそ400キロメートルのワヌコ市の郊外を流れる川の段丘上の標高1950メートルに位置する。この川はワリヤガ川に合流する。ワリヤガ川はアマゾン川の大支流のひとつである。ワヌコ盆地から乾燥が強いユンガという気候帯に位置するが、そこから100キロほど下れば熱帯のジャングル地帯に入る。

コトシュの小山にはいくつもの時代の建物が重なり、建物と一緒に出てくる土器の特徴が異なっていた。小さなニッチを持つ石造の部屋、床下を通り抜ける地下式の水路もあった。そこに、黒や茶色でつるつるしてよく光る、鐙形、平底の鉢、独特の曲線の刻文、ジャガーの目や爪の模様など、明らかにチャビン文化の特徴をもつ土器が出土した。さらに、チャビン期の建物よりも下の層から、チャビンとは違う土器が続々と出土し、石を積んだ壁や部屋構造も出てきた。さらにそれより下のレベルから、また違った土器と石造建築が現れた。チャビンに先立つ土器や石造建築が2時期も重なって見つかったのである。ところが、それよりさらに古い建築が現れた。北壁の上半分には長方形のニッチがあり、そのニッチの下の砂を取り去ると、人間の腕を交差させた形のレリーフが現れた。しっかりとした石組み、すべすべしたクリーム色の上塗り、壁のニッチ、そして交差した手のレリーフをもつ、普通の住居とは思えない建物である。泉靖一はこれに「交差した手の神殿」と命名した（写真2、3）。

チャビン文化の建物が紀元前800年頃で、交差した手の神殿は紀元前2000年頃にさかのぼる。1960年当時、それほど古い時代の石造建築は南北アメリカには例がなかった。アンデス文明はチャビンに始まるという、それまでの定説は完全に覆された。

「文明は豊かな農業の余剰があって生まれるという説はアンデスには通用しない、アンデス文明は神殿から始まった、初めに神殿ありきである、泉はそう結論し、第一報を天野さんにもたらした。天野さんは飛んできた。そして二人は手を取りあって発掘の成功を喜んだ」（大貫2015）。

コトシュでの発掘調査は、1960年、63年、66年と続き、大きな成果を挙げた。調査団は、その後ラ・パンバ、ワカロマなどで発掘を行った。そして、1988年にクントゥル・ワシ遺跡の発掘に着手し、その後20年に亘って大規模な発掘と修復が行なわれた（写真4、5）。



写真1 コトシュ発掘（東大調査団、1960年）



写真4 クントウル・ワシ神殿の発掘



写真2 コトシュの交差した手の神殿（東大調査団、1963年）



写真5 クントウル・ワシ神殿の修復



写真3 交差した手

クントウル・ワシでは、1989年の発掘で、神殿を構成する基壇構造や広場、石彫、壁画の発見などが続き、調査終了間際に、床下から墓が見つかり、見事な細工の金製品などの副葬品が発見された。紀元前800年頃という時代の金製品が正規の発掘で出土したのは初めてのことであった。南米最古、南北アメリカ大陸で最古の金製品として、東大アンデス調査団の発掘は再び世界の考古学会から注目を集めた。さらに、その後の発掘により、重なりあう三つの神殿構造が明らかになり、形成期後期の神殿建設過程の詳細が解明され、学術的な大きな成果が蓄積されていった。結局9つの墓から多くの金製品を含む副葬品が出土した（写真6）。

金製品の保存をめぐる地元との間に緊張関係が生じた。結局、大貫良夫（当時団長）を中心に、日本の官民の協力で博物館を建設し、村人で構成される文化協会がその所有と管理を担うことになった（写真7、8、9）。これは、研究者による地域貢献、また文化財の地域住民による管理運営の重要な事例となっている。



写真6 クントウル・ワシで黄金が発掘された墓地



写真9 住民との交流。博物館の前で踊る地元の生徒たち



写真7 クントウル・ワシ博物館の開設



写真8 クントウル・ワシ博物館の展示

### 3 天野芳太郎とその出会い

#### 3-1 天野芳太郎の生涯

天野は1998年（明治31年）に現在の男鹿市脇本に生まれた（以下、天野芳太郎の生涯については、尾塩尚1984、天野芳太郎先生顕彰碑建立実行委員会1993、天野芳太郎生誕100周年記念誌編集委員会1998を参照。表1）。土木関係の請負業をしていた父親の吉治（51

歳没）と母ナオ（39歳没）の長男で、タケという妹がいた。父親の仕事の関係で、小学校時代に北海道に2度転校している。県立秋田工業学校を卒業して、神奈川県造船所に就職した後、鋳物工場を経営し、横浜で「子育て饅頭」屋を開業する。

幼いころから読書好きで、太っ腹で万事におもいきりが良かったという。1928年（昭和3年）30歳の時、天野は以前から思い描いていた海外雄飛を果たす。繁盛していた子育て饅頭をやめ、1万円を懐に入れ船に乗った。アフリカ南端の喜望峰を回り、南米ウルグアイのモンデビデオに上陸した（写真10）。そこで、スペイン語を学ぶために小学校に入れてもらった。

父吉治の死でいったん帰国を余儀なくされたが、再び中南米に渡る。その際、海外行きに反対した妻と別れ、2人の娘を知人に預けて、渡航する。天野は中米のパナマに渡りそこで百貨店を始めた。1933年、天野は現地の日系2世と結婚して一男一女をもうける。パナマでビジネスを始めた天野は、「一国一業」という目標を掲げ、チリ（農場経営）、コスタリカ（漁業）、ペルー（金融）等の事業を広げ、中南米有数の実業家と言われるようになる。

天野は、少年時代に北海道や秋田で石器を採取したことが、考古学への情熱のはじまりだったという。パナマを拠点に中南米を股にかけて飛び回りながら、古代の遺物の収集を始めていた。1935年には、ハイラム・ビンガムの著書を読みマチュピチュについて知ると、ただちにペルーに飛びマチュピチュを訪問する。そこで野内与吉と出会う。

しかし、太平洋戦争が勃発すると、パナマにいた天野はスパイと疑われて拘束された。膨大な蔵書やコレクションを含め、財産のほとんどを没収されてしまう。そして、最初はパナマ、後に北米の収容所に収容される。

天野は、生前自らの生涯について語ることに、また話すことは少なかったが、北米収容所での体験を中心に、「わが囚われの記」に記している。その一説に、スパイ説の背景と同時に彼の戦前のビジネスについて触れており、興味深いので、少し長く引用しておこう

表 1 天野芳太郎略譜

1898年（明治31年）	秋田県男鹿市に生まれる
1916年（大正5年）	県立秋田工業学校卒業。神奈川県横浜市に転居
1923年（大正12年）	横浜で関東大震災に遭遇、「子育て饅頭」を開店
1928年（昭和3年）	横浜から博多丸で世界1周の市場調査に出発
1929年（昭和4年）	ベネズエラで貿易会社設立。パナマに移住し天野商会を開店。 南米各地に事業を興し巨万の富を築く
1941年（昭和16年）	太平洋戦争勃発と同時にパナマで逮捕・抑留
1942年（昭和17年）	日米交換船で横浜に帰還
1951年（昭和26年）	2月横浜を出帆した船が遭難するが奇跡の生還 3月ふたたび横浜からパナマ経由でペルーに上陸 インカ・フィッシング会社を設立し成功を収める
1957年（昭和32年）	泉靖一東大助教授が天野邸を訪問： 意気投合し、泉は古代アンデス文明に魅了される
1958年（昭和33年）	新宿伊勢丹で「古代アンデス文明展」開催 第1次東京大学アンデス調査団がペルーへ出発
1960年（昭和35年）	第2次東大アンデス調査団がコトシュ遺跡発掘： 「交差した手の神殿」を発見（団長泉靖一）
1964年（昭和39年）	5月天野博物館竣工、8月天野博物館が正式発足
1980年（昭和55年）	吉川英治賞受賞
1982年（昭和57年）	国際交流基金賞受賞。10月14日84歳で逝去



写真10 海外雄飛。アフリカの喜望峰にて

（天野芳太郎1982：13-14）。

読者はルーズベルトが真珠湾爆撃の報を受けるや、直ちに電話をもってパナマ防衛司令官を呼び出し、『運河は安全なりや』と糺したことを記憶されているであろう。……こんな物騒な運河地帯から二マイルと離れない所に、パナマ共和国の首都パナマ市がある。そして私がおの町に十三年もの永い間商店を営んでいたということ、それ自体がアメリカの官憲の注意を惹くに十分な条件であった。しかもその上に偶然の符合と言おうか、私の行動には怪しめば幾らでも怪しめる点が数多く存在していたのである。私は何よりも眺望のよい場所が好きなので、クレストという郊外の山の中腹に家を建てた。ところが、建ててみたらパナマ湾はもとより、運河の入口まで一望のもとに見下される。出船入船が、坐ながらにして手に取るようにして数えられる。これがアメリカから黙過されるはずはな



天野丸

写真11 日本で建造した天野丸。コスタリカで漁業会社を設立

い。一九四一年の七月中旬には「ニューヨークタイムス」紙すら大人気もなく、私の家のことを採り上げ、「何故、日本人天野に運河の見えるところに家を建てさせたか」と論じていた。

また、私はパナマの隣りのコスタリカ国のプンタレーナスという港で、東太平洋漁業会社という、名前だけ聞くと相当大きな会社らしいが、実は資本金僅か十二万ドルほどの漁業会社をやっていた。会社の持船の内、天野丸という二百五十馬力のディーゼル・エンジン船は日本で建造し、太平洋を横断して行った優秀船である（写真11）。これに日本人漁師が十六名も乗り込んで、パナマ運河から二三百マイルの海上で鮪漁業をやっていた。アメリカがスパイ船なりとして厭がったのも無理はない。リチャード・ウイルマー著すところの『シークレット・エージェンツ・アメリカ』の中には、御丁寧に天野丸の断面図を掲げ、ここに機雷室がある、ここに魚雷発射管があると説明を付けている。



写真12 チリの農場で馬に乗る天野芳太郎

私はまた、チリー国コンセプション市の郊外に、一千町歩ほどの農場を経営していた(写真12)。ところが、ここからチリー第一の海軍根拠地、タルカワノ軍港が丸見えである。そのためにアメリカは邪推して、私が何かチリー海軍と黙約があつてこの農場を持っているように思っていた。

その他、私の仕事は、エクアドル国やペルー国に資本関係を有していたので、いつも定期的にパナマ、コスタ・リカ、エクアドル、ペルー、チリー、と旅行し、時々には漁業のことで中米を通過してカリフォルニアを訪問せねばならなかった。また一年置きに仕入れの都合で必ず日本に帰った。彼らにしてみれば、私が別個の目的をもって中南米を飛び回り、その打合せのために日本に帰るものとしか思われなかった。

天野は、収容所で特に過酷な扱いを受けるが、それでも強い精神力を発揮して、日本人収容者たちのリーダーとして活動する。そして半年後、第一回捕虜交換船で、日本に送還される。同じ捕虜交換船にのっていた鶴見俊介が、天野芳太郎について次のように記している(鶴見ほか2006:143)。「ひと月も一緒にいると、天野芳太郎は、もう、傑出した人物だということがわかるんだ。南米の文化を知らせるために、自分で博物館をつくる。坂西さんだってすごく高くなっていてしょ」。

ここに出てくる坂西(志保)は、元アメリカ議会図書館東洋部長で、やはり同じ捕虜交換船で送還されたが、天野に惚れ込み、天野を説得して「わが囚はれの記」を書かせた。彼女はその本の序で次のように記している(坂西1943初版、1983:6)。

忘れもしない昨年六月十八日朝、私は交換船で帰国出来るとわかった。四人の官憲に護送され、汽車で紺育(ニューヨーク)に送られた。……FBIの手で一時間ばかり取調べられ、やがて廊下に並べた食卓の隅に私は座った。私の正面に、痩せた体にダブダブの葉葉服を着、眼鏡の下から異様に光る眼をした人がいた。……この葉葉服の紳士が尋常一様の人でないことは、直ぐに感じられた。……

葉葉服一着と小さな頭陀袋一つ下げて、グリップスホルム号に乗った天野さんは、その夜から多忙であった。開戦と同時にパナマを追われ、各地のアメリカ軍隊に苛め尽くされて、ようやく交換船に乗って、失心したようになった人々を労わり慰められた。……一般向けの講演会を開くことに定めた時、第一番に選にあたったのは天野さんで、中南米を紹介し、また長年の蘊蓄を傾けられたインカの文化について、数回に亘って講ぜられた。

……他に例を見ないのは、あの温厚な心構えの内にある気概である。泣く子もだまるような気概が、天野さんの内に漲っている。しかも、会って何よりも人の心を動かすものは、天野さんの底にある人間らしい心だと、私は思う。

### 3-2 再びペルーへ、そして泉靖一との出会い

天野芳太郎の二度目の結婚の相手は、日本人の父とペルー人の母をもつ二世の藤井テレサ志津子で、二児をもったが、戦時中の1944年結核で亡くなっている。このとき、天野は狼のような声をあげて泣いたという。

しかし、終戦を迎えると、天野の南米への情熱が再燃する。1951年、天野は密航のようなかたちでペルーに渡る。天野が再び事業を興し、チャンカイ谷の発掘と遺物コレクションに没頭し始めた頃、スペイン語の学術書や資料の整理を手伝うようになったのが渡辺ロサ美代子さん(1929年生まれ)である。当時の二人について書いた元ペルー新報記者・屋嘉聡見の記述が残されている。「やがてチャンカイ遺跡の発掘へ。ここは木かげもない乾燥地帯、美代子さんは日に照らされ、ホコリにまみれ、せせせと出土品を整理したり、ノートをとった(写真13)。ここで美代子さんは思いがけない発見をする。仕事に打ち込んでいる人の美しさ—それは天野さんの姿である。何ごとにもひいでたその人がら、恋に似た気持ちをいただくようになっていた。一方、天野さんの気持ちにも同じ変化が起こっていた。女学校を出たばかりの若い女性が映画も見ず、大はやりのバイレ(ダンス)にも行かず、地味な仕事に熱中している美代子さんの姿になんとなく心がひか





写真13 チャンカイ谷の沙漠で土器を発掘する天野夫妻

れる一美代子さんが助手になってから三年目、一九五四年十一月十日、たくさんの日系人の祝福を受けて、二人は結婚へゴールインした」(屋嘉1965)。

天野は、それまでペルー人考古学者がまったく注目していなかったチャンカイ文化の素朴な土器、優れた織物に惹かれた。彼は、土器、織物にとどまらず、小さな木片、石器、縫い針も通らぬ細い穴をあけた石のビーズなど、丹念に拾い集め、アンデスについての文献を読み、また古代の人々の思いに強い共感を抱いていた(写真14)。しかし、「そうした思いを共に語る友や仲間がいなかった。当時のペルーには戦前の移住者たちが多くいたけれども、古代文化には興味がなく、また日本や中国の古代史や詩文をよく知る者はいなかった。そこへひょっこり天野を訪ねてきたのが泉であった」(大貫2015)。

泉靖一は、当時の京城帝国大学で文化人類学を学び、東北アジアの民族文化を研究対象にしていた(大貫ほか2010:57)。戦後引き揚げて、東京大学に就職したが、以前のフィールドには戻ることはできず、今後の方向を模索していた時期でもあった。ユネスコの委嘱を受けてブラジルの日系社会の調査に赴き、日本への帰路に、ペルーのリマで天野と出会ったのである(写真15)。すでに述べたように、行動的な泉はすぐにアンデス研究プロジェクトとして調査団を組織し、1958年第一次調査を実施した。泉を団長とするアンデス調査団によって翌1960年からコトシュ発掘が始められた。コトシュでの天野について、大貫は次のような思い出をもっている(大貫2015)。

天野さんの助言があったに違いないが、発掘に先立って鉤入れ式を盛大に挙げるようになった。地元ワヌコ市の市長と州知事、教会の大司教、教育関係者、医者、日系人家族、そしてリマから文部省文化財局長、日本領事、その他企業駐在員の何人かなど、そうそうたる顔ぶれといえるだろう。そして天野さんは前日からワヌコに飛んできて、当日は朝から式典の場所選び、パーティーのためのテーブル設営、その上に並べ



Clasificando y ordenando el espacio de cada pieza.

写真14 土器をもつ天野



写真15 泉靖一と寺田和夫(当時東大助教授)を迎える天野(1963年)

るものなどを大声で指示していた。「大貫君、コップを持ってきなさい」「大貫君、日本のタバコをもっと並べなさい」。最年少の私は泉・曾野・寺田の諸先生の指示だけでなく天野さんの言うことも聞かねばならない。しかも天野さんの指示はいろいろと細かい。はい、はいと返事はしても内心は「団員でもないのにうるさい爺さんだな」と思った。しかし、その指示はやはり的確で式典後のパーティーは盛り上がり、招待者は満面の笑みを浮かべ歓談をし、なかなか帰らずついには夕方になってしまった。

泉靖一と出会い、東大アンデス調査団の発掘を支援する傍ら、天野は考古遺物の研究、整理と博物館建設に勢力を注ぎ、ついに1964年にリマに博物館を開設する(写真16、17)。そして、その3年後、天野にとって至福の時が訪れる。1967年、皇太子殿下(今上天皇陛下)ご夫妻が、南米三カ国を訪問したおり、天野博物館に立ち寄ったのである。天野芳太郎は、リマ郊外のパチャカマック遺跡を案内し、さらに天野博物館を



写真16 天野博物館と天野夫妻（1964年創設）



写真18 今上天皇両陛下（皇太子時代）を遺跡にご案内する天野



写真19 天野博物館の展示を今上天皇両陛下（皇太子時代）に説明する天野



写真17 天野博物館の展示室

案内した（写真18、19）。このときの感想を、旧知の小池道夫（ペルー味の素初代社長）宛の手紙に次のように記している（尾塩1984：503、小池1998：65）。「皇太子殿下御夫妻の御臨幸は十四日午後、五時十分から六時までの五十分でありました。光栄でありました。私はこの五十分の為に生きて来たと思っております」。

### 3-3 マチュピチュ村初代村長・野内与吉

マチュピチュ再発見100周年に当たった2011年、筆者は、大貫良夫（館長）とともに、野外民族博物館リ

トルワールド（愛知県犬山市）で、天野博物館の収蔵品を展示する特別展「古代アンデス文明展」を企画し、開催した。そのオープニング・セレモニーで、三重県在住の野内セサル良郎と出会った。野内セサルは、マチュピチュ村（旧アグアスカリエンテス）の生まれで、子どものころはマチュピチュ遺跡が遊び場だった。16歳のときに来日し、日本で高校と大学を卒業した後、働きながら、名古屋市の国際親善大使「かたるマイスター」などとして、小中学校でペルー文化を紹介する活動をしてきた。

筆者が話を聞くと、セサルはマチュピチュ村の出身で、移住者の野内与吉の孫にあたるというので驚いた。野内与吉は、中南米で事業を拡大していた天野芳太郎が、1935年にマチュピチュを訪れたときに遺跡を案内した日本人である。このマチュピチュ訪問と野内与吉との出会いとが、天野芳太郎がその後アンデス考古学に身を投じる大きな契機となったことは想像に難くない。

当時、野内与吉は現地で旅館を経営しており、天野芳太郎はそこに宿泊してマチュピチュ遺跡に通った。その踏査の案内をしたのが野内与吉である。尾塩尚が



写真20 野内与吉とその家族



写真23 三笠宮殿下（前列左から2人目）をチャンカイ遺跡に案内する天野（前列左から4人目）と泉（左端）



写真21 1930年代のマチュピチュ駅



写真22 マチュピチュ駅前の野内ホテル

プロデュースした映像『アンデスの英傑—日本人天野芳太郎の生涯』でも、現地でレストランを経営する、野内与吉の長男のホセ（野内セサルの伯父にあたる）が登場し、父与吉について語っている。

野内与吉は1895年福島県大玉村の生まれ。1917年、20名の福島県出身の契約移民の一人としてペルーに渡

り、サン・ニコラスというアシエンダ（大農園）に配耕された。その後の足取りは定かでないが、のちにクスコ＝マチュピチュ間の鉄道建設に携わり、開通後はマチュピチュの麓のマキナチャヨに住みつき、現地の女性と結婚して家族をもった（写真20）。ホテル業などを営むかたわら地域の環境整備にも努め、住民の信頼を得て、初代行政長になった（写真21、22）。

野内与吉が日本を発って以来、故郷の大玉村の家族との音信が途絶えていた。ところが、1958年、三笠宮殿下がブラジル移住50周年の式典に出席された帰路ペルーに寄り、マチュピチュを訪問した際に、野内与吉の長女オルガが殿下に花束を贈呈し、それが日本の新聞に報道された（福島民報1963.7.22版）。そこで、日本の家族が与吉の消息を知り、大使館を通じて連絡をとり、旅費を送って帰国が実現したという。与吉は、52年ぶりにふるさとに帰国した。「日本に残れ」という実家の勧めを辞退し、マチュピチュに残した家族のために現地に戻ると、まもなく亡くなった。

ちなみに、三笠宮殿下のペルー訪問の際、リマでは天野芳太郎が殿下を案内し、そのとき、リマに来ていた泉靖一も同行している（写真23）。

野内与吉の孫の野内セサルは、祖父の出身地である福島県大玉村やマチュピチュ村を再訪し、埋もれていた祖父の生涯の掘り起こしに精力を注いでいる。また、大玉村の親族や村民の有志によるマチュピチュ訪問団を企画し、高山市とウルバンバの姉妹都市締結を仲介するなど、日秘交流に務めてきた。さらに2015年10月には、祖父の出身地である大玉村とマチュピチュ村の友好協定がマチュピチュで締結された。将来は、マチュピチュ村に日本人移住博物館を開設するという夢を持っている。

野内セサルの叔母にあたるオルガは2015年に亡くなった。生前、オルガは三笠宮殿下からいただいたネックレスをいつも大切にしていた。「いつかお礼を言いたい」と口癖のように言っていた。そして、オルガが殿下に花束を贈呈した時から57年後の2015年6月、大貫の仲介で、野内セサルと母のホセフィーナは、御所



**写真24** 叔母にあたるオルガの遺志を伝えるため、57年後の2015年6月に三笠宮殿下との対面を果たした野内セサルと母ホセフィーナ（右端は大貫、左端は稲村）

に三笠宮殿下を訪問しオルガの遺志を伝えるという夢が叶った（写真24）。

ところで、天野は、マチュピチュ訪問の翌年の1936年に発行した「あちら、こちら物語」に「マチュピチュ物語—インカの旧都が世に出るまで」としてハイラム・ビングムによるマチュピチュ「発見」の顛末を紹介している。天野自身の感動が、ビングムの記述の翻訳の詩的な表現に込められている。「マチュピチュ物語」は1940年発行の「中南米の横顔」にも再録された（天野1945：198-210）。天野芳太郎の著書の中に、野内与吉の記述を見つけることは出来ないが、1940年（天野が訪問した5年後）にマチュピチュを訪れた日本人の福中今次が次のように書き残している（福中1940：145-146）。福中は1936年発行の天野の著書を読んでいるはずである。

117キロの旅は、軽便鉄道が利用できる。約2時間半もするとマチュピチュの駅に着く、そこに小部落がある。恐らく2、30家族もあろうか、もちろん土民ばかりであるが、この村の村長がたった一人ここにいる日本人である事が不思議である。福島県人の野内という人で、インカの後裔という女性を妻にして村長兼ホテル経営者で無論部落唯一のホテルである。室は5指で数え得る程しかない。けれどかかるアンデス僻遠の地に日本人経営のホテルがあるという事は非常な喜びを覚える。早速その所に投じて主人と共に故国の事どもを語り合わたした。

### 3-3 BIZEN中南米美術館創設者の森下精一

天野博物館設立50周年を記念して企画した展示会の展示品の選定のため、大貫良夫と筆者は、BIZEN中南米美術館を訪問し、そのコレクションのすばらしさに驚いた（写真25）。この美術館を創設した森下精一と天野芳太郎との出会いは、どのようなものだったの



**写真25** BIZEN中南米美術館収蔵庫にて、森下矢須之（館長）と大貫良夫



**写真26** 森下精一

であろうか。

森下矢須之（館長）の祖父にあたるBIZEN中南米美術館創設者の森下精一（写真26）は、魚網製造販売の事業で財をなし、天野芳太郎との出会いによって、中南米古代文明の遺物の魅力にとりつかれ、晩年そのコレクションに打ち込んだ。『森下精一伝』をひもくと、優れた事業家であった森下精一が、同じく事業家からアンデス考古学に身を投じた天野芳太郎に非常に大きな影響を受けたことがわかる。

森下精一は、1904年（明治37年）日生で生まれた。父金吉は漁師だったが、1920年から精米などの商売に



写真27 森下精網



写真28 BIZEN中南米美術館外観

転換し、精一もそれを手伝い、やがて、魚網の事業を始めた。勤勉・実直、他人に思いやりがあって、努力を惜しまない森下精一は、柔軟で進取の精神にも恵まれ、日本の戦後の復興とともに事業を拡大し、海外にも販路を大きく広げた（写真27）。

森下精一（当時、森下魚網製造株式会社社長）は、1969年に岡山県主催の貿易調査団の団長として、北米を巡回した。その日程を終了したあと、中南米に四十日間の商用旅行を行ったが、その折にペルーで天野博物館を訪問している。輸出担当の社員として同行した真嶋高德が、そのときの様子を印象深く記述している（森下精一伝編纂委員会1980：279）。

ドクトール天野芳太郎を館長に仰ぎ何人かの書生さん、天野夫人による接待を頂いたが、絶世の美女で物腰対応総て優雅でそのかもし出される何とも言えぬ雰囲気、天野婦人にクレオパトラの再来を感じさせられた私は安心してしまっただけ茫然と見とれていた。会長（森下精一氏）と言え、紀元前二千五百年前後（筆者注：年代は正確ではない）の古代インカ文明の遺物（織物、焼物、土器等）の前に座られてただ「ウン」、何の説明を受けてもうわの空で正に放心状態、目はランランと輝きを増し、地球の裏側の異人の先達が残してくれた精巧且つ、如何にしてこの様な物が手造りで出来たのかそのノウハウに敬服され、頭を巨大なハンマーで一撃喰らった様な仕草で、遂には陳列物の前のフロアーに土下座されてしまったのには、ただ啞然と私も成すすべもなく、その日の商談予定を棒に振るキャンセルの電話連絡に奔走するやらで……。

森下精一が中南米の土器、土偶などに特別に興味をもった理由についても、日経新聞への寄稿で次のように記されている（前掲書：97-98）。

私は魚網の製造販売に従事していた関係からある年、取引先である中南米に旅行する機会を得た。そして各地にすぐれた古代文明の伝統があり、エジプトやインドの古代文明にも比するべき大文明が、中央アメリカやアンデスにかつて栄えていることを知ったので

ある。その折ふれた素朴で、不思議な遺物の数々は、うちに秘めた偉大な先住民の歴史のはかなさとともに、いまだに強く私の心に焼きついている。（中略）中南米文化との新しい出会いは、私にまた違ったひとつの目を開かせてくれた。たとえば、ひとつのツボがある。おそらく日常の器として使用したものであろう。確かに必要からくる形としての美しさを持っている。しかし彼らはそれに人や、動物や、植物や、身近にあるいろいろなモチーフをふんだんに用いることによってひどくユーモラスでなまなましい、不思議な世界をつくり出している。このなまなましい迫力。そして何かを語りかけてくる素朴な親近感、ちょうど私たち人間が大自然の中で生きることの厳しさや楽しさを根本から問い直しているような、そんな思いをふと抱かせる。私は考古学を勉強したこともなければ、それに対する知識もない。なぜそんなものにひかれるのか……とよく聞かれるが、いまもってその気持ちがうまく表現できない。土器や土偶のかもしだす素朴さ、神秘性に魅せられてしまったのだろうか、つねづね素朴さを失うまいとする私の気持ちが共鳴したのだろうか……

この記述の中に、庶民の文化としてのチャンカイ文化をこよなく愛した、天野芳太郎の大きな影響を見ることが出来る。チャンカイの土器や織を手にしなから、森下精一にその魅力を説いている天野の姿が目に見えようである。森下は、その後なんどもリマの天野博物館を訪れ、天野から博物館の展示の方法などを学んでいる。

こうして、もうひとつの運命的な出会いが、日本にもうひとつの素晴らしい博物館を生み出す原動力となった（写真28、29）。森下精一が1975年に設立したBIZEN中南米博物館の運営を引き継いだ孫の森下矢須之は、ゆるキャラ、音楽・舞踊とのコラボなどを通じて、中南米古代文明の魅力と意義を人びとにわかりやすく伝えるユニークな博物館の運営を行っている。さらに、中南米各国大使館と共同して、多彩な国際交流活動を実践している。





写真31 展示会場全景

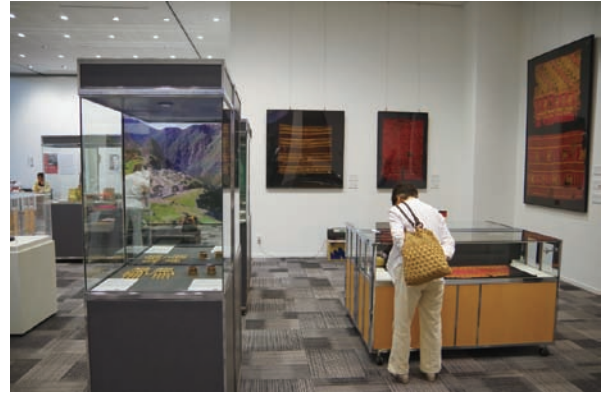


写真34 金製品と織物の展示コーナー



写真32 写真パネル



写真35 遺品の展示コーナー



写真33 土器の展示



写真36 巨大マチュピチュ写真前の記念撮影

与吉の遺品を加えた（図5）。天野芳太郎の遺品の内容は、日本で拾い生涯大切にしていた石器（天野芳太郎の考古学への関心の原点）、二眼レフ・カメラ、北米収容所で使用した歯ブラシ、櫛、鏡など、それに手作りの碁盤（ボタン製の基石付き）など、さらに、尾塩が関係者から収集した天野自筆の手紙、天野の著書などである。野内与吉の遺品は、マチュピチュ鉄道建設に従事し、運転士としても活躍した経歴を示す、手作りの工具類などである（写真31～35）。

展示のアトラクションとして、マチュピチュ巨大写

真の前で、民族衣装で記念写真が撮れるようにした。これは、期待通り、来場者の方々に大いに楽しんでいただいた（写真36、37）。また、BIZEN中南米美術館と日本マチュピチュ協会によって民芸品などのショップも出すことにした。

#### 4-2 展示の準備

展示のパネルなどはすべて手作りで用意しなければならなかった。幸い、放送大学でA2版プリンターを活用し、写真パネルや解説パネルを印刷することがで



写真37 民族衣装の試着

きた。市販の接着剤付きの発泡スチロール製パネルを使えば、手作りでも見栄えがするものを作ることができる。

展示会の大きな問題のひとつは人手の確保であったが、放送大学秋田学習センターの井上浩所長のご尽力により、学生さんたちにボランティアとして参加していただくことができた。マチュピチュ写真の脇に民族衣装の無料試着コーナーを設け、ボランティアさんには、衣装の試着の手伝いやショップを担当していただき、展示の監視も兼ねていただいた。さらに放送大学のPRコーナーを設けた。学生ボランティアさんたちが、熱心に自らの学習の楽しさを語り、来館者に発信するというシステムが自然にでき、これは放送大学の広報のモデルとして大変有効であると実感された。

東大での展示会最終日の翌日（6月22日）、BIZEN中南米美術館の収蔵品、黄金装飾品レプリカ、マチュピチュ巨大写真などを美術梱包輸送業者に委託して搬送した。秋田では開幕の2日前（6月26日）に搬入し、秋田大学の学生ボランティアさんたちに設営の手

伝いを頼んだ。設営の最大の課題は、巨大マチュピチュ写真だったが、幸いにも幅10メートルの壁面にぴったりと収まった。展示ケースは、行灯型ケース13点を秋田県立博物館から借用することができ、これに土器類16点がちょうど納まった。不足のケースは、宝飾用ケースとタワー・ケース、計13点を地元の業者からリースした。タワー・ケースには黄金レプリカを展示し、宝飾ケースに遺品などを展示した（図6）。

入場料としてワンコイン500円を徴収することにした。無料の開催も考慮したが、多少なり入場料をいただくことで、展示の重要性を認識していただき、しっかりと見学していただくという趣旨で有料とした。期間中に有料入場者は約1500人となった。秋田魁新報関係者の佐藤典氏によれば、会場への交通の不便な点を考慮すれば、秋田としては十分な入場者数だとのこと。最後の3日間に900人が集中したので、駐車場の容量を超えてしまって、入場を断念した人もいたと聞いた。期間がもう少し長ければ来場者はずっと増えただろうと思われる。

来場者の方々は、たいへんに熱心に長時間見学されていた。アンケート用紙の自由記述欄には、「我が郷土出身の方に この様に 行動的な方いらしたとは、存じあげず 恥ずかしい限りです。天野さん!! 後世の世界の方々へ良き史的財産を残され、示してくださいましたこと 秋田県人の誇りと強く思います。貴重な資料を間近に見せて戴きまして 関係者の皆様ありがとうございました!!」「古代アンデス文明のすごさを感じる事が出来た。天野さんの偉業をこの展示会で改めて教えられた。もっと県の偉人を県民に教える機会があったらいいと思った。秋田の誇りです。日本の誇りです。」など、多くの満足の声が記されていた。

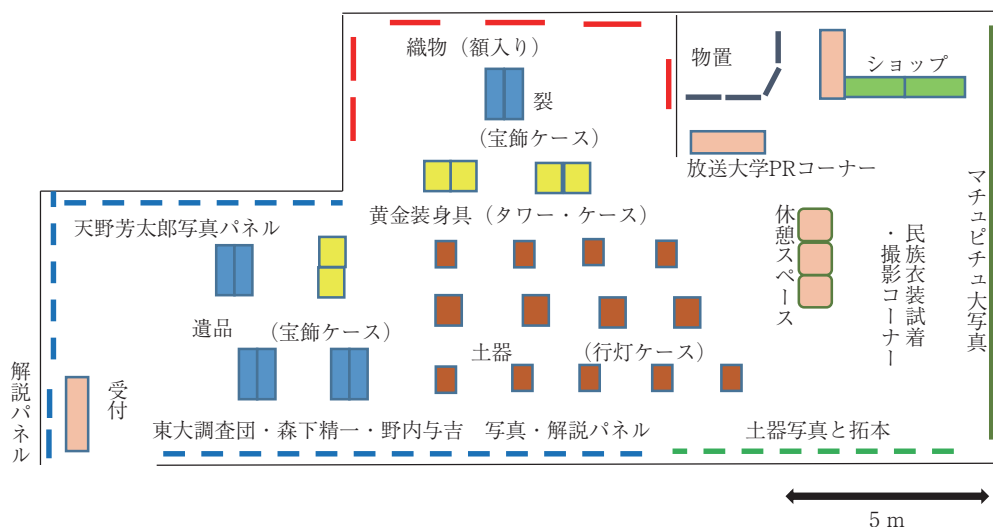


図6 「アンデスに魅せられた男 天野芳太郎」展展示プラン



## 謝辞

秋田での展示会の開催にあたっては、佐藤典氏らのご尽力により、秋田魁新報社に共同で主催していただき、会場としてさきがけホールを提供していただいた。田中利昭氏、青柳光明氏、青柳信人氏のご好意により、(株)中日映画社に共同主催をしていただいた。また、秋田の医師土田正夫先生にもご協力いただいた。

展示品については、BIZEN中南米美術館の収蔵品に加え、天野ロサ美代子理事長、天野マリオ副理事長、天野ミカ館長のご好意により、天野織物博物館(リマ)から天野芳太郎の遺品をお借りした。また、東京大学アンデス調査団からクントゥル・ワシ遺跡出土の黄金製品レプリカを借用した。日本マチュピチュ協会(会長ホセフィーナ・カルモナ・デ・ノウチさん)から野内与吉の遺品をお借りした。秋田県立博物館(風登森一館長)から展示ケースをお借りした。天野芳太郎顕彰会(会長高桑繁氏)から、天野博物館所蔵土器の拓本と写真パネルをお借りした。天野千恵子さんから、天野芳太郎由来の織物をお借りした。石原繁野さん(染織研究家)から天野芳太郎と採取した織物等を提供していただいた。石原繁野さんと米澤寿美子さん(編集、著述業)から天野芳太郎自筆の書簡をお借りした。森田玉水さん(日本書学館審査会員)に天野芳太郎作の和歌を書にいただいた。

リトルワールドで開催した「古代アンデス文明展」の際に、(株)ニューリー(社長新井慎也氏)が開発したカメラ・スキャナーによりマチュピチュ遺跡の「立体写真」を撮影したが、東京の展示会で、その巨大写真を無償で提供していただいた。野外民族博物館リトルワールドからは、民族衣装をお借りした。

伊中義明氏(朝日プリンテック)には、会計の監査をしていただいた。木村友美さん(大阪大学助教)には、解説パネル制作を手伝っていただいた。また、熊田道夫氏(元日経映像)、青柳和子さんには、展示会のショップの管理等をしていただいた。

放送大学秋田学習センターの井上浩所長をはじめ、スタッフの方々、学生ボランティアのみなさんに多大の協力を得た。

すべての方々のお名前を挙げることはできないが、多くの協力者によって、展示会の開催が実現した。衷心より謝意を表したい。

本稿は、平成27年度学長裁量経費I(プロジェクト支援)「博物館科目の充実・OL化、及び学芸員資格授与に向けた予備調査」の成果の一部である。ご支援に謝意を表したい。

## 参考文献

- 天野芳太郎1940『中南米の横顔』朝日新聞社  
 天野芳太郎1943『わが囚はれの記』汎洋社  
 天野芳太郎1983『わが囚はれの記—第二次世界大戦と中南米移民』中公文庫  
 天野芳太郎先生顕彰碑建立実行委員会1993『南米のシュリーマン 天野芳太郎—その生涯と顕彰碑建立の記録—』あきた南米交流会  
 天野芳太郎生誕100周年記念誌編集委員会1998『天野芳太郎生誕100周年記念誌 南風光砂』天野博物館友の会  
 稲村哲也2014『遊牧・移牧・定牧—モンゴル、チベット、ヒマラヤ、アンデスのフィールドから』ナカニシヤ出版  
 稲村哲也2016「展示論とは・展示の構想と具現化—リトルワールド本館展示」稲村哲也編『博物館展示論』放送大学教育振興会、11-31頁  
 大貫良夫1992『黄金郷伝説』講談社現代新書  
 大貫良夫1998「第一章 交差した手の神殿」加藤泰建・関雄二(編)『文明の創造力—古代アンデスの神殿と社会』角川書店、43-94頁  
 大貫良夫・加藤泰建・関雄二2010『古代アンデス 神殿から始まる文明』朝日新聞出版  
 大貫良夫2015「アンデス考古学に残る足跡」『秋田さきがけ新報』(6月22、23、25日)  
 尾塩尚1984『天界航路—天野芳太郎とその時代』筑摩書房  
 小池道夫1998「天野先生との奇しき縁」天野芳太郎生誕100周年記念誌編集委員会『天野芳太郎生誕100周年記念誌 南風光砂』天野博物館友の会、62-67頁  
 坂西志保1943(初版)「序」天野芳太郎著『わが囚はれの記』汎洋社、1-4頁  
 坂西志保1983「序」天野芳太郎著『わが囚はれの記—第二次世界大戦と中南米移民』中公文庫、5-7頁  
 杉山三郎・嘉幡茂・渡部森哉2011『古代メソアメリカ・アンデス文明への誘い』風媒社  
 鶴見俊介・加藤典洋・黒川創2006『日米交換船』新潮社  
 福中又次 1940『インカ帝国と日本人』国際文化研究協会(東京渋谷区原宿)  
 森下精一伝編纂委員会1980『森下精一伝』中央公論事業出版  
 屋嘉聡見1965「インカに憑かれた日本人夫婦」『主婦の友』11月号

(2015年11月13日受理)